

# 『新撰讃美歌：ソルファー譜附』（1891） ——フェリス・セミナリーにおける受容——

秋 岡 陽

## はじめに

『新撰讃美歌』は明治中期に出版された、日本の賛美歌史上もっとも重要な歌集のひとつである。同歌集は一致教会と組合教会が合同して編集にあたり、歌詞のみの版が1888（明治21）年に、五線譜つきの版が1890（明治23）年に、そして「ソルファー譜附」の版が1891（明治24）年に発行された。この「ソルファー譜」とは何なのか、また、五線譜つきの版がすでにありながら、併せて「ソルファー譜」が必要とされた事情はどのようなものだったのか、横浜、とくにフェリス・セミナリー（フェリス和英女学校）の当時の賛美歌教育のケースを通して考察する。当時の来日宣教師たちが、将来的には日本人が口伝で教えずとも五線譜を使って独力で賛美歌をうたえるようになることを期待しつつ、その前段階としてトニック・ソル＝ファ・システムを用いることが適切と考えた状況がそこから見えてくる。また、このシステムを導入した効果は大きく、当時のフェリス・セミナリーを例にとるなら、それまで賛美歌の音がうまくとれなかった生徒たちが「ソルファー譜」のおかげで目覚ましく歌唱力をのばした事実が確認できる。それは単に正確に音がとれるようになっただけでなく、気持ちをこめて心からの賛美ができるようになるという大きな変化だった。

## 『新撰讃美歌：ソルファー譜附』

『新撰讃美歌』「緒言」<sup>1</sup>によると、同歌集を編集する委員が、1886（明治19）年の春に、一致教会と組合教会によって選出された。一致教会（日本基督一致教会；長老派・改革派）からは奥野昌綱、植村正久、瀬川浅、フルベッキGuido Herman Fridolin Verbeckが、組合教会（日本組合基督教会；会衆派）からは松山高吉、宮川経輝、田村初太郎、オルチンGeorge Allchinが委員として選ばれた。しかしおもに編集に従事したのは、詩に関しては奥野昌綱、植村正久、松山高吉、そして音楽に関してはオルチンだった<sup>2</sup>。

『新撰讃美歌』は、まず歌詞のみの版が1888（明治21）年4月に出版された。表紙・奥付によると、発行者は植村正久・奥野昌綱・松山高吉、印刷者は須原徳義（横浜市太田町、製紙分社<sup>3</sup>）、発行所は警醒社（東京京橋区）だった。1888年のこの版では、オルチンが音楽を担当することは記されているものの、彼が担当する作業の内容についての言及はなく、そもそもこのときは歌詞のみが印刷され楽譜は掲

1 『新撰讃美歌』（警醒社、1888年）「緒言」1ページ。

2 同上。

3 後の東京印刷株式会社横浜分社（横浜市太田町6丁目94番地）。製紙分社は、1894（明治17）年にメソジストの『譜附基督教聖歌集』でも五線譜（movable typeによる活版印刷）を用いた賛美歌集を印刷している。

載されなかった。しかし、2年半後の1890年（明治23）年12月に五線譜つきの版が出されたときには、巻頭の序（見出しを「緒言」から「序」に変更）に補筆が行われ、オルチンが、当時の日本人会衆が賛美しやすいよう、独自の工夫を施したことが補記された<sup>4</sup>。それによると、オルチンは、四声（S.A.T.B.）の合唱譜を掲載するにあたり、当時の日本の諸教会がまだ混声合唱では歌えず、最上声部だけを会衆が斉唱することになる実状に鑑みて、最上声部が会衆全体にとってもっとも歌いやすい音域になるよう、曲の音高を下げる操作をしたという。このように音域が下げられて書きかえられた曲は、収録された286曲のうち約100曲ほどだった。

書名【著者】	発行者	印刷者	発行所	発行日	備考
『新撰讚美歌』（SAMBIKA） 【讚美歌（編修）委員】	植村正久・奥野昌綱・松山高吉	須原徳義（横浜市太田町〔製紙分社〕）	警醒社	1888（明治21）年4月	歌詞のみ
『新撰讚美歌』（HYMNS AND SONGS OF PRAISE） 【讚美歌編輯委員】	植村正久・奥野昌綱・松山高吉	須原徳義（横浜市太田町：製紙分社）	（記載なし）	1890（明治23）年12月	歌詞＋五線譜
『新撰讚美歌：ソルファー譜附』（HYMNS AND SONGS OF PRAISE）【讚美歌編輯委員】	植村正久・奥野昌綱・松山高吉	須原徳義（横浜市太田町：製紙分社）	（記載なし）	1891（明治24）年4月	歌詞＋トニック・ソル＝ファ譜； オルチンによる「ソルファー譜附緒言」つき

『新撰讚美歌』（五線譜つき）が発行された約半年後、1891年4月に『新撰讚美歌：ソルファー譜附』が発行された。以下に同じ歌を2つの譜例で示した。左の譜例が、1890年の『新撰讚美歌』（五線譜つき）に収められた頌栄（OLD 100TH）、右の譜例が1891年の『新撰讚美歌：ソルファー譜附』に収められた同じ曲である。『新撰讚美歌：ソルファー譜附』では五線譜は使われず、かわりに階名を示すアルファベットによる文字譜が用いられたことがわかる。

**265. OLD HUNDRED. 8888. (L.M.)** Doxology.

**265. OLD HUNDRED. 8888. (L.M.)** Doxology.

基音 G. (Key).

```

:d | d :t1 | l1 :s1 | d :r | m :m | m :m | r :d | f :m | r |
| ち と こ み た ま の め ぐ み あ る か み ま
:s1 | s1 :s1 | m1 :m1 | m1 :s1 | s1 :s1 | s1 :d | t1 :d | d :d | t1 |
|m | m :r | d :t1 | l1 :t1 | d :d | m :s | s :m | l :s | s |
:d | d :s1 | l1 :m1 | l1 :s1 | d1 :d | d :d | s1 :l1 | f1 :d1 | s1 |

```

```

:d | r :m | r :d | l1 :t1 | d :s | m :d | r :f | m :r | d |
| あ ゆ つ ち こ ち り て よ ろ こ び た ま へ よ
:l1 | s1 :s1 | s1 :s1 | l1 :s1 | s1 :s1 | s1 :d | t1 :l1 | t1 :d | t1 | d |
|m | r :d | t1 :s | f1 :m :r | m :m | d :m | s :l | s :s :f1 | m |
:l1 | s1 :d | s1 :m1 | f1 :s1 | d1 :d | d :l1 | s1 :r1 | m1 :f1 :s1 | d1 |

```

『新撰讚美歌：ソルファー譜附』の巻頭にはオルチンが書いた「ソルファー譜附緒言」という文章が掲載された。その要点は次のようにまとめられる：（1）日本ではキリスト教会が日をおって進歩して

4 『新撰讚美歌』（五線譜付き、1890年）「序」3ページ。

おり、そこで使われる賛美歌も発達上進しなくてはならない、(2)しかしこれまでの日本における賛美歌指導は教師の歌うのを真似て口移しにするもので、これでは時間がかかりすぎて進歩も遅い、(3)本来であれば五線譜を自分で読めるようにするのが「音楽の正則」なのだが、五線譜は難解で、文学にたとえるならば漢文を読むようなものである、(4)しかしカナ文ともいべき「ソルファー」法という簡便でわかりやすい方法があるので、これを紹介することにした<sup>5</sup>。

以上のような緒言の文章を読むと、当時の日本の賛美歌指導の課題が何だったか、また、妥協策としてトニック・ソル=ファ譜を導入せざると得なかった理由がわかる。また、五線譜をあくまでも「音楽の正則」と位置づけ、軽んじていたわけではなかったこともわかる<sup>6</sup>。

## オルチンとトニック・ソル=ファ・システム

オルチンとはどのような人物であり、彼が導入しようとしたトニック・ソル=ファとはどのようなシステムだったのか。ジョージ・オルチンGeorge Allchin (1852-1935)は、組合派のアメリカ人宣教師。イギリスで生まれ、20代にカナダを経てアメリカ合衆国に移住した。メイン州のバンガー神学校Bangor Theological Seminaryを経て、さらにマサチューセッツ州のウィリアムズ・カレッジWilliams Collegeを卒業。学生時代から音楽に興味を持ち、学内クワイヤのメンバーとして活躍した。卒業後、牧師として活動ののち、1882年にアメリカン・ボードAmerican Boardの宣教師として、配偶者ネリーNellie M. Allchinとともに来日、大阪の複数の組合教会を拠点に宣教活動を始める<sup>7</sup>。さらに梅花女学校の音楽の教員をつとめると同時に、一致教会と組合教会の合同賛美歌集『新撰讃美歌』の編集に際して音楽面で中心的な役割を担った。また1900年には日本語による賛美に関する初の本格的な研究論文「Hymnology in Japan」<sup>8</sup>をまとめて発表した。さらに、オルガンの教本『風琴教授詳説』(1891年)を出版したほか、独自の幻燈伝道の活動を展開したことでも知られる。また工学に関する専門知識をいかし、各地のキリスト教学校の建築設計・監督も行った。数度の短期帰国時期をはさみ、1919年まで、40年近くにわたって日本で宣教に従事。晩年、合衆国に帰国後、1931年に一時日本を再訪したが、1935年にニューヨークで逝去している<sup>9</sup>。

5 『新撰讃美歌：ソルファー譜附』「ソルファー譜附緒言」1ページをもとに要約。なお、要約文中の「」は本稿筆者による。

6 日本語の緒言のほかに、巻末に以下のような英語のPREFACE TO THE SOL-FA EDITIONも掲載されている：  
“The necessity for improving the singing in public worship, is becoming more apparent as the churches in Japan are becoming larger. The usual method of teaching tunes by rote is laborious and unsatisfactory, and any attempt to teach the average congregations to read music by means of Staff Notation would be almost fruitless. The Japanese of ordinary singing ability need some easy and comparatively rapid method of reading hymn-tunes; and it is in answer to this urgent demand that a Tonic Sol-fa edition of the Hymns and Songs of Praise (*Shinsen Sambika*) is issued.”

7 John H. Hewitt, *Williams College and Foreign Missions: Biographical Sketches of Williams College Men Who Have Rendered Special Service to the Cause of Foreign Missions* (Boston: Pilgrim Press, c.1914), pp. 579-583.

8 *Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan / Held in Tokyo October 24-31, 1900* (Tokyo: Methodist Publishing House, 1901), pp. 461-502.

9 海老澤有道『日本の讃美歌』(香柏書房、1947年)、77ページ。

オルチンが日本に導入しようとしたトニック・ソル=ファ・システム Tonic Sol-fa system についても、まず簡単に、概略をまとめておこう<sup>10</sup>。同システムは、サラ・アンナ・グラヴァー Sarah Anna Glover (1786-1867) が始めた賛美歌の歌唱指導法をもとに、ジョン・カーウェン John Curwen (1816-1880) が体系化したシステムで、19世紀後半にイギリスで普及した。階名を梯子状に並べた音階図 (モデュレーター-modulator) を用い、階名唱を重視しつつ、音階各音の機能を体得させながら音感教育・視唱指導を行う。また、五線譜だけではなくトニック・ソル=ファ譜とよばれる文字譜を使用。階名唱のシラブルの最初のアルファベットを並べて、次のように旋律を表記した：

{ | d r | m r |

さらにカーウェンは、後に、補助的な工夫として、音高を示すハンドサイン (右手) や、リズム分割を示すフィンガーサイン (左手) も考案する。この教育システムは19世紀後半にイギリスの初等公教育で歌唱指導に採用され、とくに初歩の歌唱指導方法として普及した。

なお、トニック・ソル=ファ・システムを論じるときには、(1) 「トニック・ソル=ファ唱」 (一種の階名唱法) と、(2) 「トニック・ソル=ファ譜」 (一種の文字譜) と、(3) 「トニック・ソル=ファ・システム」という言葉を使い分ける必要があり、(1) と (2) を採用しただけでは (3) を行ったことになるわけではない<sup>11</sup>。

## 横浜におけるオルチンの講演会

関西でおもに活動したオルチンだが、1889年9月20日、横浜に来て、日本人を対象とした歌唱指導に関する講演を行っている。会場は、フェリス・セミナリーに完成したばかりのヴァン・スカイック・ホール。前年に『新撰讃美歌』の歌詞のみの版 (1888年) が出版され、続く五線譜つき (1890年) と「ソルファー譜附」 (1891年) の出版準備が行われていた時期だった。新しい賛美歌集は横浜太田町の製紙分社で印刷されることになっていた。この仕事のためにオルチンが横浜に来る機会もあったと考えられる。そうしたなかで実現したのが、ヴァン・スカイック・ホールでの講演会だった。

オルチンが1889年9月20日にヴァン・スカイック・ホールで行った講演の英語原稿「Vocal Music in Japan: Tonic Sol-fa *versus* Staff Notation (日本における声楽歌唱：トニック・ソル=ファvs五線譜)」は、当時横浜で発行されていた2つの英字新聞にほぼ同文で紹介されており<sup>12</sup>、その内容を具体的に知ることができる。オルチンは、トニック・ソル=ファ・システムを日本人の歌唱指導に用いてきたこれまでの経験について次のように語る。「私は7年間にわたり、大阪市内の大規模な女学校と、諸教会の大勢の会衆に歌唱指導をしてきた。……最初、私は日本の文部省のシステムを使ってみて、そのチャートも教科書もとてもよくできていると思った。しかし (実際に教えてみた) 結果に満足できなかった。次に

10 詳細は東川清一『退け暗き影「固定ド」よ!』(音楽之友社、1983年) 参照。

11 東川清一、前掲書、36ページ。なお、後述のように、フェリス・セミナリーで行われたものは、たしかに(1) や(2)のなかの都合の良い部分をとりいれたものではあったが、必ずしも真正のトニック・ソル=ファ・システムではなかった可能性がある。

12 *The Japan Gazette* (1889.9.21), p. 3、および *The Japan Weekly Mail* (1889.9.28), p. 291。両者はほぼ同内容。ただし *The Japan Weekly Mail* のほうは文章の後半を割愛する形で紹介している。

私は（トニック・ソル=ファの）モデュレーター（音階図）を導入し、トニック・ソル=ファ唱の課題をいくつか黒板に書いて初級のクラスで使ってみた。するとその結果のほうがずっと良いものだった。そこで私は、トニック・ソル=ファ・システムを、日本の唱歌の教科書や五線譜の教材と一緒に使おうと思うようになった。<sup>13</sup>

また、オルチンの講演から、トニック・ソル=ファ・システムはイギリス出身者には馴染みがあったが、アメリカから来日した者には馴染みのないものだったこともわかる<sup>14</sup>。すなわち、フェリス・セミナーの教員たちにとって、それは馴染みのないシステムだったことになる。後述するように、オルチンの講演を聞き、またこのシステムを用いた新しい賛美歌集（『新撰讃美歌：ソルファー譜附』）が発行されることを知ったフェリス・セミナーの校長ブースEugene S. Booth（1850-1931）は、横浜で当時トニック・ソル=ファ・システムによる音楽教室を開いていたエミリー・S. パットンEmily Sophia Patton（1831-1912）のもとに急遽教員を派遣し、トニック・ソル=ファ・システムによる音楽の教授法を学ばせることになる。

またこのことと関連して、オルチンは次のような興味深い指摘をしている。「イギリス人はほとんどがみんなで歌う訓練ができていますが、アメリカ人たちは歌えません。横浜港に停泊しているイギリス海軍とアメリカ海軍のそれぞれの艦上礼拝に出席してみるとよくわかるのですが、イギリス艦上の水兵たちは全員が歌うのに、アメリカ艦上の水兵たちはまったく歌えません。簡単なソル=ファ譜をつかった教育をうけた効果は、このような海軍の比較からも明らかなのです。」<sup>15</sup>初等公教育でトニック・ソル=ファ・システムを用いているイギリスの水兵は歌う力がついているが、五線譜しか使わない米国の水兵はきちんと声をだして歌うことができない、というのである。

オルチンのこの日の講演からは、当時の平均的な日本人に西洋風の旋律による賛美歌を教えることがいかに困難だったかという事情も見えてくる。彼はこの講演のなかで、日本人は歌が好きで、とにかく歌おうとすること、しかしそれは西洋人の耳からすると歌とはよべないものであることを次のように指摘する。「日本人は音楽的な国民である……しかし外国人の基準からすると彼らの歌は歌とは言えない……書籍販商人の証言では、賛美歌集のほうが聖書よりもたくさん売れているという。昨年（=1888年）、新しい日本語の賛美歌集（=『新撰讃美歌』）の歌詞だけの版を出したが、発売予約後1カ月もしないうち

13 “For seven years I have been teaching vocal music in a large girl’s school, and to many of the largest churches in the city of Osaka. [...] At first I used the system established by the Japanese Educational Department (*Mombusho*) and found their Charts and Music Readers very useful. But the results were not satisfactory. Next I introduced the modulator and wrote some Tonic Sol-fa exercises on the blackboard for the lower classes. The results were so much better as to induce me to adopt the Tonic Sol-fa system, together with the Japanese Music Readers and Readers in the Staff Notation.” *The Japan Gazette* (1889.9.21), p. 3、および *The Japan Weekly Mail* (1889.9.28), p. 291。

14 “While the Tonic Sol-fa system of music is well known to all who have come from England, it is not known to most who have come from America.” *loc. cit.*

15 “While the masses of the people of England are becoming musically educated the masses, [*sic*] of the people of America are unable to sing. It has been observed by those who regularly attend the services on board ships of the British and American navies in the harbour of Yokohama, that while every sailor on the British ships sings, most of the sailors on the American ships are silent. The leavening work of the simple Sol-fa notation has brought its results even in the navies.” *loc. cit.*

に、約2万冊が売れた。日本人が、教会に行こうと決心したとき、最初に購入する本は賛美歌集である。男も女も子どもも、会衆はとにかく歌おうとする。』<sup>16</sup>この発言から、当時の日本人が教会生活を始めようとするとき、聖書よりも先にまず賛美歌集を買おうとしたことがわかる。さらに、1888（明治21）年に発行された『新撰讃美歌』（歌詞のみの版）が、発売予約が始まって1カ月もたたないうちに約2万冊も売ったことが明らかになる。

明治期前半の日本人にとって、西洋音楽の音感がそもそも未経験のもので、西洋の歌をうたえるようになるためにはゼロからの訓練が必要な状態だったことは、フェリス・セミナリーの創立者キダー（ミラー）Mary E. Kidder [Miller] (1834-1910) が高知の日本人教会に出席したときの次の報告からも垣間見られる。「みんなが歌うのですが、実のところ外国人が加わって歌唱をリードしていない礼拝に足を踏み入れたならば、彼らがいったい何を歌おうとしているのか皆目見当がつかないはずです。そしてそれが実は《Old Hundredth》<sup>17</sup>だったりするのです。』<sup>18</sup>フェリスの日本人生徒に対する賛美歌指導も、最初はこうしたゼロの状態からの出発だったろう。賛美歌の歌唱指導は、宣教師たちにとって克服しなければいけない大きな困難のひとつだった。

そうした状況への対応として、オルチンは1889年の横浜の講演会で、トニック・ソル=ファ・システムの有効性を訴えると同時に、文部省が採用した教育システムの問題点を指摘、さらに講演の最後に「この冬にもトニック・ソル=ファのクラスを横浜でも始めるべき」との提案を行った。<sup>19</sup>

## フェリス・セミナリーにおけるトニック・ソル=ファ・システム導入

オルチンの講演会が開催されたことは、フェリス・セミナリーのその後の音楽教育に決定的な意味もった。その日の講演会に参加したフェリスの校長ブースが、この講演会をきっかけに、トニック・ソル=ファ・システムを自校に導入する決心をしたからである。『*The Japan Weekly Mail*』の1891年5月30日号<sup>20</sup>を読むと、ブースが、オルチンの1889年の講演会について回想しつつ、次のように発言したことが記録されている：「It was decided then to introduce it in this school（まさにこの〔講演会〕の時、それ〔=トニック・ソル=ファ・システム〕をこの学校〔=フェリス・セミナリー〕に導入する決心を

16 “The Japanese are a musical people, [...] Judged by foreign standards we may not call it singing [...] It is the testimony of book-sellers that they sell more hymn-books than bibles. Last year when the word edition of the new Japanese hymn-books was announced as ready nearly 20,000 copies were sold in less than a month. As soon as a Japanese decides to attend church the first book he buys is a hymn book, and every man, woman and child in the congregation makes the attempt to sing.” *loc.cit*

17 キダーの原文では《Old Hundred》。賛美歌 *All people that on earth do dwell*（詩編100）のこと。

18 “They all sing and generally speaking if you were to go into a service where no foreigner was leading the singing, you would not have the faintest idea what they were aiming at, and yet it might be *Old Hundred*.” フェリス女学院『キダー書簡集：日本最初の女子教育者の記録』（教文館、1975年）、90-91ページにも別訳がある。

19 このときの講演記録が1889年9月21日の『*The Japan Gazette*』に掲載されると、それに対して「日本の音楽家 *Japanese music teacher*」と名乗る人物から反論記事が寄せられ、その後、日本でトニック・ソル=ファ・システムを導入することの是非についての論争が展開されることになった（詳細は武石みどり「音楽教育家エミリー・ソフィア・パットン」東京音楽大学『研究紀要』[2004年]、1-31ページ）。

20 *The Japan Weekly Mail* (1891.5.30), p. 632.

した)』。

さらに、上述の1891年5月30日の新聞記事によると、オルチンの講演を聞いた翌年、すなわち1890年にブース校長は大阪を訪れ、オルチンの歌唱指導の授業も実際に見学している。そこで目撃したものは、「a dozen voices sing in a most charming and accurate manner several part songs (10人余りが声を合わせてこのうえなく魅力的かつ正確にいくつもの合唱曲を歌っている)」<sup>21</sup>光景だった。このとき見学したのは、オルチンが当時音楽教員をつとめていた大阪の梅花女学校の授業と思われる。

前述のように、トニック・ソル=ファ・システムはイギリス出身者には馴染みがあるが、アメリカから来た者には馴染みのないものだった。アメリカ改革派教会の宣教師たちが経営するフェリス・セミナリーの場合も、当時トニック・ソル=ファ・システムを用いて賛美歌指導のできる教員はいなかった。校長ブースは、ちょうど横浜でトニック・ソル=ファ・システムを用いる音楽教室を開いたばかりのパットンのもとに教員を派遣して学ばせることになる。

エミリー・S. パットン Emily Sophia Patton (1831-1912) はイギリス出身のオーストラリア人。1889年に来日し、63 Bluffに居を構え、ここで主に外国人を対象とした音楽・舞踏教室(あわせて社交儀礼も教授)を開いた。当時の『*The Japan Gazette*』の広告を見ると、(1) ピアノ演奏、和声、理論、楽曲分析に関する上級の生徒の教授、(2) トニック・ソル=ファ・システムによる音楽教育と合唱指導、(3) 社交のための舞踏および礼儀を教えたほか、(4) 大人向けのトニック・ソル=ファ・システムの教授法の指導もしたことがわかる<sup>22</sup>。こうした大人向けの指導者育成を兼ねたクラスに、校長ブースがフェリス・セミナリーの教員を派遣したと思われ、デヨ Mary Deyo とモルトン Julia A. Moulton の2名の教員の受講記録が残っている。

パットンは当時の居留地の外国人の間で有名な文化人だった。彼女はロンドンで生まれるが、少女時代にイギリスを離れてニュージーランド経由でオーストラリアに住んだ。1870年代の半ばから音楽の教育活動を本格化、メルボルンでトニック・ソル=ファ・システムの指導を受け、1880年代前半にはロンドンのトニック・ソル=ファ・カレッジ Tonic Sol-fa College から指導資格を得た。その後1889年にパットンは日本に移住、横浜に住んだ。日本滞在中、フェリス・セミナリーのブース校長と親交をもち同校の音楽教育に影響を与えたほか、179 Bluffにあったヴィクトリア・パブリック・スクールのメアリー・エレン・ヒントン Mary Ellen Hinton や、のちに東洋音楽学校を創立する鈴木米次郎(当時神奈川県尋師範学校教員)なども指導。1894-95年に短期間だが東京音楽学校でも指導にあたった。

フェリス・セミナリーの2人の教員、デヨとモルトンがパットンの門をたたいた正確な時期はわからない。しかし1890年のフェリス・セミナリーの動向を報告した文書のなかに「声楽のクラスも目に見えて進歩している。生徒たちの音感が鋭く正確になっていくのは、実に嬉しいことである。最上級の生徒の幾人かは、簡単な曲であれば初見でリズム、メロディーともかなりの正確さで両手の演奏ができる。我々はトニック・ソル=ファ方式への満足度を益々深めている。この方式は、聴覚の訓練、暗譜の訓練、手の合図など様々な方法を用いることにより、音楽への関心が極めて乏しい者にもその楽しさを教えて

21 *ibid.*

22 *The Japan Gazette* (1889.9.14, 1889.9.23, 1889.10.5 [supplement], 1889.10.3, 1889.10.31).

くれている」<sup>23</sup>という文章が現れることから、1889年秋のオルチンの講演の直後から準備が始められ、1890年にはすでにフェリス・セミナリーでもトニック・ソル=ファ・システムに基づく音楽教育が始められていたことがわかる。

『新撰讃美歌：ソルファー譜附』が発行された1891年は、おりしも世界各地でトニック・ソル=ファ・システムの50周年の記念行事が行われた年だった。『*Japan Weekly Mail*』1891年5月30日号にも、特集記事「Tonic Sol-fa Jubilee (トニック・ソル=ファ50周年)」が掲載される。同記事には、この年の春にロンドンで行われる記念式典に出席するために、オルチンが渡欧したことも報告されている。この年はまた、フェリス・セミナリーに同システムが導入されて2年目にあたる。5月29日には、ヴァン・スカイック・ホールで、ブース主催による50年記念式典が行われた。『*The Japan Weekly Mail*』の1891年5月30日号の記事によると、式典の冒頭、主催者ブースが壇上に立ち、「日本人はわれわれが言うところの音楽好きという意味では、実は音楽好きとはいえない人たちだった……日本人は和声についてほとんど理解がなかった。耳も声も洗練されておらず、発達していなかった」と日本人に音楽を教える困難さについて説明<sup>24</sup>、さらに、1年半前にこの同じ会場でオルチンの講演を聞いてからトニック・ソル=ファ・システムを知るようになり、その後実際に大阪でオルチンの授業を見学して、これこそ自分の学校に導入すべきシステムだと確信するに至ったという経緯を説明した。また式典の最後には、校長ブースは次のような報告も行っている：「トニック・ソル=ファ・システムで学んでも、次に五線譜を使って歌うことになったときに、助けにならないという印象をもっているとしたら、訂正しなくてはならない。というのも、(フェリス・セミナリーの教師モルトンが、トニック・ソル=ファ・システムで指導した)生徒たちに五線譜で書かれた新曲を歌わせてみたところ、生徒たちが音程を正しく歌えるようになっていたことが認められたのである」<sup>25</sup>。すなわち、「正則」だが難解な五線譜にかわり、簡便な導入システムとしてトニック・ソル=ファ・システムを採用したが、それは決して遠回りな指導方法ではなく、次の段階で五線譜を使って指導するさいにも直接的に役立つことが確認された、と報告されている。

1892年1月19日には、フェリス・セミナリーの2人の教員に受講修了証が発行される。パットンがロンドンのトニック・ソル=ファ・カレッジの本部に申請して発行されたもので、デヨにはElementaryの修了証が、モルトンにはElementaryとIntermediateと、さらにElementary Theoryの修了証が発行された<sup>26</sup>。この間も、フェリス・セミナリーにおけるトニック・ソル=ファ・システムの教育の効果は目覚ましいものがあった。1892年の状況に関して、次のような報告書が書かれた。「声楽のクラスも着実

23 フェリス女学院150年史編纂委員会編『フェリス女学院150年史資料集第3巻：RCA伝道局報告書に見るフェリス』(学校法人フェリス女学院、2015年)、67ページ。

24 “The Japanese were not a music-loving people, as we speak of music-lovers.[...]The Japanese know very little of harmony. Both ear and voice were crude and undeveloped”. *The Japan Weekly Mail* (1891.5.30), pp. 632-634.

25 “. . .to correct the impression that Sol-fa would not help pupils to sing in the staff notation, that she had tried her pupils with pieces in staff that they had not seen before, and found they were able to sing the intervals correctly”. *The Japan Weekly Mail* (1891.5.30), p. 634.

26 こうした音楽・舞踏教室の運営に関する資料や当時使われた大量の教材が武蔵野音楽大学図書館に保管されており、そこにはフェリス関係者に関するさまざまな情報も含まれる。同資料の調査報告は、武石みどり「音楽教育家エミリー・ソフィア・パットン」東京音楽大学『研究紀要』(2004年)、1-31ページ。



に進歩し、一番初級でも簡単な楽譜なら初見で読め、練習するとかなり正確に2部合唱ができる。金曜日には全校生徒が会して賛美歌の練習をしている。使用しているのは新しく出版されたトニック・ソルファ方式の賛美歌の本で、伴奏なしでもほとんどの曲を即座に歌うことができる。この方面での生徒たちの進歩は非常に満足すべきものである。』<sup>27</sup>また、1893年のフェリス・セミナリーの状況に関する記録は、生徒たちの著しい進歩を次のように伝えている。「声楽第1組の8人全員が初級と中級課程を修了し、去る7月の卒業式で修了証<sup>28</sup>を授与された。第2組の13人にも11月に中級課程の修了試験に合格した。アメリカその他各地の見学者から、本校生徒の歌唱に対し賞賛の声があがっていることは喜ばしい限りである。一般に日本人は音楽を解さず、声も音楽に適さない調子はずれといわれているなか、生徒たちはよく努力を重ねてきたといえる。』<sup>29</sup>

そうしたなか、1894年に、パットンと、当時来浜中だった彼女の弟子ブロクサムAda Beatrice Bloxhamが東京音楽学校の嘱託教員に採用されるというニュースが横浜居留地の人々を驚かせ、喜ばせた。パットンがそもそも来日した目的は、日本政府に働きかけ、日本の音楽教育の基礎にトニック・ソル=ファ・システムを採用させることだった。ところがパットンが来日したときはすでに手遅れで、ボストンから招かれたアメリカ人音楽教育家ルーサー・ホワイトティング・メーソンLuther Whiting Masonを中心にまとめられたシステムが日本政府に採用されたあとだった。ところが今回、いよいよパットンに、東京音楽学校で教えるように要請があった。彼女の横浜での教育活動の成果を知る外国人たちの間にこのニュースは歓迎され「政府の賢明な決断を喜ぶと同時に、今後の大きな成果が期待され、今回の任用を心から喜ぶものである」という新聞記事があらわれた<sup>30</sup>。ブース校長を始めとするフェリス・セミナリー関係者にとっても、自分たちの採用したシステムが日本政府にも公式に認められるかもしれないという期待が高まったに違いない。

1894年秋、パットンとブロクサムは横浜居留地の人々の期待を背負って東京音楽学校に乗り込む。当時山手のパブリック・ホールで報告のスピーチをしたパットンは「東京音楽学校でトニック・ソル=ファ・システムが採用されることになった。東京音楽学校から数名の教員が横浜まで見学に来て、子どもたちの歌を聞いてたいそう驚き、この子どもたちの教育に用いられているシステムを日本の学校に導入する意味があるという結論に達した。そのことは我々にとって誇りとすべきことである」<sup>31</sup>と意気揚々の演説をした。このように周囲の大きな期待を背負いつつ、気負って東京に乗り込んだパットンだったが、しかし東京音楽学校での雇用は半年しか続かず、翌年度の契約の更新は行われなかった。日本の公教育にトニック・ソル=ファ・システムを導入する試みは失敗に終わった。このあと同システムは、フェリス・

27 フェリス女学院150年史編纂委員会編『フェリス女学院150年史資料集第3巻：RCA伝道局報告書に見るフェリス』前掲書、74ページ。

28 ここでいう修了書は、ロンドンの本部が発行する正式の修了書ではなく、フェリス・セミナリーが独自に発行したオリジナルの修了書。詳細は秋岡陽「フェリス女学院とトニック・ソル=ファ・システム」フェリス女学院資料室紀要『あゆみ』第69号（2016年）、1-23ページ。

29 フェリス女学院150年史編纂委員会編『フェリス女学院150年史資料集第3巻：RCA伝道局報告書に見るフェリス』前掲書、77-78ページ。

30 *The Japan Weekly Mail* (1894.9.29), p. 355.

31 *The Japan Weekly Mail* (1894.10.27), p. 489.

セミナーをはじめとする、いくつかのミッション・スクールを中心に教えられるシステムになった<sup>32</sup>。この時期、日本の音楽教育におけるトニック・ソル=ファ・システムの位置づけは確定的になった。また、フェリス・セミナーが採用した音楽教育システムの日本における位置づけも確定した。それは日本の初等教育における主流のシステムになることはなくなり、限られたミッション・スクール等における傍系の教育システムとして終わることになった。パットンはその後1901年にいったん日本を離れて上海に渡り、その後は日本と中国を行き来する生活をして1912年に没する。

### フェリス・セミナーにおけるトニック・ソル=ファによる賛美歌指導

パットンが横浜を離れたあとも、フェリス・セミナーではモルトン Julia A. Moulton (1852-1922) を中心にトニック・ソル=ファによる歌唱教育が続けられた。モルトンはフェリス・セミナーでは音楽の授業も担当したが、音楽の専門教育を受けた人ではなく、もともとは宣教師の家族として来日し、フェリス・セミナーでは音楽のほかに聖書・英語の授業も担当していた<sup>33</sup>。このモルトンがフェリス・セミナーで行ったトニック・ソル=ファの教育は、自己流の解釈でアレンジしたものだった可能性がある。前述のように、トニック・ソル=ファ・システムを論じるときには、(1) トニック・ソル=ファ唱と、(2) トニック・ソル=ファ譜と、(3) トニック・ソル=ファ・システムを区別して考える必要があり、(1) と (2) を採用しただけでは (3) を行ったことになるわけではない。しかしモルトンが日本人生徒向けに始めたのは、(1) と (2) のなかの都合の良い部分だけをとりいれたもので、真正の (3) ではなかった。

その根拠のひとつが、当時のフェリス・セミナーの講堂にかけられた音階図 (モデュレーター) である。音階図の実物は失われて現存しないが、講堂の風景を撮影した写真に音階図の様子が写っており、それを見ると、フェリス・セミナーで使われた音階図には「ド・レ・ミ……」の階名だけでなく、本来そこに存在しないはずの「C、D、E……」の音名まで併記されている<sup>34</sup>。この一見奇異な音階図から想像されるのは、モルトンが教えたフェリス・セミナーのトニック・ソル=ファは、実は徹底した階名唱に基づくものではなく、音名とも連携させた折衷的なものだったということである。1889年のことを記した年次報告書のなかに「トニック・ソル=ファ方式は、少し修正を加えれば日本人が必要とするものに最も適しているように思われる」<sup>35</sup>という表現が出てくるが、モルトンが行ったのはまさにこの「少し修正を加えた」ものだったと考えられる。

32 この時期、神戸女学院でもトニック・ソル=ファ・システムによる音楽教育が始まっている。詳細は、津上智実「図書館の宝物から (その3) : トニック・ソル=ファの掛図」神戸女学院史料室『学院史料』vol. 28 [2015年]、46-56ページ；津上智実「トニック・ソル=ファの掛図と教本に見る明治期の音楽教育」『神戸女学院大学論集』第62巻第1号 (2015年)、117-129ページ。

33 秋岡陽「ジュリア・A. モルトン着任の背景：フェリス音楽教育に転機をもたらしたもの」フェリス女学院資料室紀要『あゆみ』第66号、3-19ページ。

34 詳細は秋岡陽「フェリス女学院とトニック・ソル=ファ・システム」フェリス女学院資料室紀要『あゆみ』第69号 (2016年)、1-23ページ。

35 フェリス女学院150年史編纂委員会編『フェリス女学院150年史資料集第3巻：RCA伝道局報告書に見るフェリス』前掲書、63ページ。

このように、確立されたシステムとしてのトニック・ソル=ファと比べると、フェリス・セミナーで実践されたものは不徹底で、実は折衷的な独自のものを実施していた感が否めない。しかしトニック・ソル=ファというものができたそもそも原点が、「五線譜を習ったこともない会衆を賛美歌がうたえるようにする」ためのものだったことを考えるなら、フェリス・セミナーではその原点はしっかりと押さえつつ一定の効果を上げたと評価することができる。上述のように、モルトンはたんなる音楽教師だったわけではなく、第一にまず宣教師だった。

トニック・ソル=ファ・システムの原点ともいえるのは、イギリス人のサラ・アンナ・グラヴァーが、五線譜を読めない会衆のために考案した、賛美歌の指導法だった。彼女の指導法は『*Scheme to Render Psalmody Congregational* (賛美歌の歌唱を会衆のものとするための計画)』<sup>36</sup>という本にまとめられたが、この指導法の所期の目的が何であったかは、この書名が何よりもよく表している。それは必ずしもきちんとした教育を受ける機会があるわけではない一般の会衆が教会で賛美歌を歌えるようにするためのものだった。このグラヴァーの指導法をもとに、その後ジョン・カーウェンがトニック・ソル=ファ・システムを整えるが、このカーウェンという人物も、もとは非国教会の牧師で、会衆の賛美歌指導への熱意がこのシステムをまとめる原点になっていた。五線譜を読めない会衆の教会での賛美の声を強めることがトニック・ソル=ファの原点だったとするならば、モルトンがフェリス・セミナーでおこなった指導はその原点にまさに忠実なものだったといえる。

フェリス・セミナーにトニック・ソル=ファ・システムが導入された時期は、『新撰讃美歌』の発行业が進められていた時期だった。この賛美歌集が画期的だったのは、歌詞だけの版、五線譜つきの版、「ソルファー譜附」の版、という3種類の出版物が用意されたことである。ソル=ファ譜付の本格的な賛美歌集が日本で発行されたのはこれが最初である<sup>37</sup>。トニック・ソル=ファ譜の部分の編集を担当したのはオルチン。発行された時期は、オルチンがフェリス・セミナーでの講演会で「この冬にもトニック・ソル=ファのクラスを横浜でも始めるべき」と発言した1年半後。このあいだにフェリス・セミナーではモルトンやデヨがパットンのもとで指導法を学び、生徒たちへの指導をすでに始めていた。すべてが計画どおりのタイミングだったようにも見える。それが意図されたことかどうかは別として、結果として、トニック・ソル=ファ譜による賛美歌集が出版された1891年春の段階で、フェリス・セミナーの生徒たちはそれを使って賛美歌を歌えるよう準備がなされていた。

しかし、その後、五線譜を見て直接に旋律が歌えるようになる日本人が増えるのにさほど時間はかからなかった。『新撰讃美歌』に続く、次の共通賛美歌集である1903(明治36)年版の『讃美歌』になると、トニック・ソル=ファ譜のみによる版は出版されず、トニック・ソル=ファ譜はは申し訳程度に五線譜版のソプラノ声部に併記されているにすぎない。そしてさらに次に発行される共通賛美歌集である1931(昭和6)年の『讃美歌』になると、トニック・ソル=ファ譜は一切採用されず、五線譜のみになった。

昭和に入ると、全国の教会やキリスト教学校のみならず、フェリス・セミナーでも、ソル=ファ譜

36 *Scheme for Rendering Psalmody Congregational: a Key to the Sol-fa Notation of Music, and Directions for Instructing a School*. Norwich: Jarrold and Sons, 1835.

37 『新撰讃美歌：ソルファー譜附』ほど本格的ではないが、トニック・ソル=ファ譜を掲載した先駆例に1876(明治9)年の『宇太登不止(うたとふし)』がある。

を使う人は主流でなくなった。1890年前後にフェリス・セミナリーにトニック・ソル=ファ・システムを導入した際に関わった人たちも、一人また一人と退職・離日・逝去していった。1912年にはパットンが逝去、1919年にはオルチンが離日する。フェリス・セミナリーでは1910年代はまだトニック・ソル=ファの指導が続けられ、課程修了証も発行されていたが、やがて1922年春にモルトンが逝去、そして同じ1922年の秋にブースが校長を退任して帰国するなか、トニック・ソル=ファの推進者はいなくなった。そして1927（昭和2）年に「専門学校入学者検定規程」によって文部大臣の指定認可を受けるさいフェリス和英女学校が提出した書類の「教科書目録」には、音楽の教科書として、第1学年に『*Sappers' Sight Singing 1*』、第2学年に『*Hollis Dann Music Course I*』、第3学年に『*Hollis Dann Music Course II*』、第4学年に『*Hollis Dann Music Course III*』、第5学年に『*Hollis Dann Music Course IV*』、第6学年に『*New Normal Music Course III*』といった書名が並ぶようになり、ブースたちによって推進されたトニック・ソル=ファの時代がいよいよ終わり、五線譜を用いた音楽教育の時代へと本格的に移っていくことになった<sup>38</sup>。

（あきおか・よう）

フェリス女学院大学音楽学部教授

---

38 フェリス女学院150年史編纂委員会編『フェリス女学院150年史資料集第2巻：近代女子教育 新学制までの軌跡：学校要覧・認可申請書』（学校法人フェリス女学院、2012年）、152-160ページ。